

森のちやれんがニュース

2019夏

Newsletter vol.16



第14回企画テーマ展

『北の手仕事2019』を開催 (2019年4月27日～6月9日)

「北の手仕事」展は2007年、2011年に続いて3回目の開催です。今回は、北海道各地で技術の伝承・学習を行っている作り手38名による刺繍作品約60点を展示しました。

これまでの展示会と同様に、出品者自身の解説を添えたことに加え、一部の作品では、刺繍制作のモデルとなった資料を並列して展示し、現在まで受け継がれ広がり続けるアイヌ文化の美と技、その魅力を紹介しました。

同時開催のニュージーランドマオリ芸術工芸学校日本巡回展「TUKU IHOー受け継がれるレガシー」では、マ

オリ芸術工芸学校の教師と生徒による工芸作品の展示や、木彫・石彫の実演、カパ・ハカの公演などマオリの芸術と文化が紹介されました。

どちらも色とりどりで魅力のある展示となり、お客様からも好評でした。

(研究職員 鈴木明世)



パフォーミング・アート「カパ・ハカ」の公演



CONTENTS

- ② 収蔵資料紹介
明治から昭和にかけての「布地帳」に収められた銘仙について
- ③ 総合展示の資料紹介・第2テーマ
映像資料「鍋沢キリさんが歌うヤイサマ」
- ④ 研究活動紹介
忠類ナウマンゾウ発見地点の再・再発掘調査を行います
- トピックス
⑥ はっけん広場 春の活動報告
地名をとおして北海道を見つめ直す——
第5回特別展「アイヌ語地名と北海道」のご案内
- ⑦ アイヌ民族文化研究センターだより
「北の手仕事展」の思い出
- ⑧ 活動ダイアリー

収蔵資料紹介

明治から昭和にかけての「布地帳」に収められた銘仙について

舟山直治

研究部生活文化研究グループ 学芸員

今回紹介する収蔵資料は、生活文化研究グループが、昨年度に登録した「布地帳」（収蔵番号：184802）です。

この中に収められている布地は、明治生まれの主婦が、大正から昭和にかけて夫や子ども達用に裁縫した生地の手帳です。そして、これを「布地帳」にしたのは、手帳の持ち主だった主婦の遺族です。制作の理由は、生涯和服で通した義母のくらしの記憶を残すため、一周忌にあたる1991（平成3）年に、茶箱にあった手帳を整理されました。手帳は、2冊の「布地帳」にまとめられ、当館の前身である旧北海道開拓記念館と、江別市郷土資料館へ寄贈されています。

これまで当館では、「布地帳」を展示資料の時代考証に用いてきました。ただ、「布地帳」の手帳は、大正から昭和の家族の衣生活の移り変わりを示すことができる貴重な資料であることから、改めて収集し、収蔵資料として受け入れて、広く公開することにしました。

詳細は、「手帳からみた後藤家の衣服のあゆみ」（『北海道博物館研究紀要』第4号、2019）に、131枚の手帳を紹介し、明治、大正、昭和の3期ごとに布名や用途に分類整理して、手帳の特徴などをまとめています。ここでは、「布地帳」の内容についての簡単な説明とともに、手帳を残した主婦が、大正から昭和にかけて長く活用していた銘仙（写真）を取りあげます。

この「布地帳」には、不明生地の1点を加えて、22品種131枚の生地の手帳があります。内訳は、絹織物が15品種74枚、毛織物が3品種42枚、木綿が2品種8枚、化学繊維が6枚となっています。手帳の年代は、明治期が1枚、大正期が56枚、昭和期が74枚です。生地の品種を使用年代ごとに分けると、大正には、紬、絹、紅絹、羽二重、銘仙、羅、セル地、別珍が多く使われています。反対に、縮緬、富士絹、正絹、モスリン、木綿は、昭和のものが多くみられます。さらに、昭和には、縞子、黄八

丈、八反、お召し、縮み、ウールに加えて、化学繊維もあり、生地の種類も多様化していることが理解できます。

絹織物74枚の内、銘仙は12枚と、数はそれほど多くはありません。しかし、その内10枚が大正の生地で、手帳の持ち主本人が着物に用いた生地です。しかも、「布地帳」の冒頭を飾ったのは、1918（大正7）年の女学校卒業時に着用した銘仙の着物であり、終生大事にしていた手帳であったといえます。「布地帳」によると、銘仙は、外出着、羽織、ねんねこ、丹前、掛け布団に用いられています。模様は、菊花、桔梗、桐、矢羽根、縞、家屋紋と豊富で、その内3枚が足柄銘仙です。

銘仙の産地には、伊勢崎、桐生、八王子、秩父、館林、佐野、青梅、飯能、村山などがあります。今後、模様などの調査を進めていくことで、残りの銘仙の産地を特定することが可能になるのでは、と考えているところです。



写真 「布地帳」（収蔵番号：184802）にある銘仙の手帳（上段左から184802-1、-19、-20、-21、22、-23。下段左から184802-24、-25、-34、-35、-85、-88。足利銘仙は、上段左から三番目の-20、上段右端の-23、下段左端の-24）

総合展示の資料紹介・第2テーマ

映像資料「鍋沢キリさんが歌うヤイサマ」

甲 地 利 恵

アイヌ民族文化研究センター 研究主幹

総合展示第2テーマ「アイヌ文化の世界」の左奥に「見て 聞いて アイヌ文化の世界」というコーナーがあります。ここでは、アイヌの口承文芸や芸能の実演を映像で見ることができます。大きいモニター1台と小さいモニター2台があり、小さいモニターでは、大きいモニターと同じ映像8点のほか、「いろいろな地域やジャンルの芸能を見たい」「物語や歌をじっくり最後まで聴きたい」といった要望に応えられるよう選んだ15点の映像を用意しています。



その中のひとつが「鍋沢キリさんが歌うヤイサマ」。鍋沢キリさん（1921～2005）のご自宅で、私が1996年3月にお話をうかがった*ときに聞かせていただいた歌のひとつです。

（私はふだん「キリさん」と呼ばせていただいていたので、以下「キリさん」と書きます）

キリさんは、門別町（現日高町）の厚賀（アッペツ・コタン）に生まれ育ち、のちに平取町に暮らしました。周りの大人がアイヌ語で会話したり伝統的な儀礼を行ったりするのを見聞きして育った一方、長じてからは和人の農家で働くなど、さまざまな生活体験をされた世代です。

私は主に歌や踊りについてお話をうかがっていましたが、それ以外にもご自身の体験をはじめたくさんのことを教わり、また当館のアイヌ文化紹介小冊子『ボン カンピソシ 7 芸能』（初版2001）の作成にもご協力をいただきました。キリさんは、声の音色を彩り豊かに変化させる伝統的な技巧を用いた歌い方のできるかたで、この映像の「ヤイサマ」をはじめ、いろいろな歌を

ぞんじでした。収録当時は70代でしたが、張りのある艶やかな高い声を保たれています。

「ヤイサマ」とは、アイヌの伝統的な歌のジャンルのひとつです。「ヤイサマネナ」「アヨロロペ」「ホレ ホレンナ」などの言葉の繰返しとともに、「鳥になりたい、風になりたい」などの決まった言い回しや、即興の歌詞で、自分の気持ちを歌っていくものとされます。メロディは、その人独自のものであったり、家族や親しい人などのメロディを用いたりもします。

キリさんは、生活した土地で覚えた歌だけでなく、出かけた先で聴いた歌などもレパートリーに加え、仲間が集まったときなどの楽しみとして歌っていました。この映像のヤイサマは、鶴川町（現むかわ町）の春日での先祖供養の儀式に出かけたとき、地元の年配の女性が歌うヤイサマを耳にし「何とかして覚えてくて、後ろの方にいて稽古して（＝いっしょについて歌って）」覚えたとのこと。キリさんは「鶴川のヤイサマ」と呼んでいました。この映像では、出身地にちなんだ「アッペツ」を織り込んで「アッペツでつらい思いをした。私は鳥になりたい、風になりたいと思ひながら涙を流している」という内容を、「ホレ ホレンナ」の繰返しとともに歌っています。

キリさんの張りのある高音と伝統的な声の技巧によって繰り広げられるヤイサマの世界を、来館の折にぜひ味わっていただきたいと思います。

ところでこの映像、キリさんの歌の魅力もさることながら、途中で一瞬、キリさんから主役をさらう役者（?）も登場します。キリさんが飼っていたネコの「サンタ」です。最初は足元に座っていましたが、キリさんが歌い始めてまもなく、すばやく膝に飛び乗り肩に抱きつきます。しかしキリさんは少し

も動じず、サンタを抱きかかえ身体を軽く揺らしながら、淡々と歌い続けます。

キリさんは笑いながら「眠れないば、夜中でもヤイサマゆってんのさ。たけ、わしの肩んとこに（サンタが）寝てて、こんど怒られてると思つてヤツと逃げてしまうの」と話していました。

日々の暮らしの中で、誰に聴かせるわけでないときでもヤイサマを歌っていたというキリさん。その歌声を日ごろから聞いていたであろうサンタがキリさんの傍らにいる光景を、私は今も懐かしく思い出します。

* このときの採録資料（録音と録画）は、当館の図書室で視聴できます。



映像資料「鍋沢キリさんが歌うヤイサマ」より

研究活動紹介

忠類ナウマンゾウ発見地点の再・再発掘調査を行います

添田 雄二

研究部自然研究グループ 学芸主査



学芸主査 添田雄二

1973年札幌市生まれ。1997年から当館学芸員。2011年に鹿児島大学で博士（理学）取得。写真は伊達市有珠で行なった地質調査体験行事（地層から過去の巨大津波を探る）の様子。

化石発見50周年

当館の総合展示室には、十勝地方の幕別町忠類で発見されたナウマンゾウ化石とその復元骨格が展示されています（写真1）。今年はこの忠類ナウマンゾウの発見50周年になります。これに合わせて、幕別町と当館では足寄動物化石博物館の協力を得て、今年の秋に化石発見地点の発掘調査を行うことになりました。ここでは、発見から今回の「再・再発掘」調査に至るまでの調査研究の経緯をご紹介します。

化石の発見とこれまでの研究

忠類ナウマンゾウは1969年に道路工事現場で発見され、翌年に行われた本格的な発掘調査と合わせて、最終的に2本の大きな牙や四肢骨など総計47点からなるほぼ1頭分の化石が産出しました（これらは全て当館に保管されています）。当初この化石は若い雄と推定され、年代は諸説が示されましたが、その後、滋賀県立琵琶湖博物館の高橋啓一博士らによる最新の研究手法によって、年老いた雄の象であることが

判明しました（高橋ほか 2008*¹）。これがきっかけとなって総合地球環境学研究所と行なった2007年と2008年の「再発掘」調査では、複数の関連分析によって約12万年前の化石と判明しました。同時に、北海道初となるナウマンゾウの足跡化石を発見し、偶蹄類（牛や鹿の仲間）の足跡化石も見つけました（写真2）。

新たな成果に向けて

再発掘調査で得られた多くの成果は、「再・再発掘」調査を行う必要性へとつながりました。

2008年は、1969年発見のナウマンゾウ化石が埋まっていた場所から深さ約3m掘り下げて調査を行ったのですが、この穴の壁面で確認されたくぼみの一つがナウマンゾウの足跡化石でした。本誌の2018年夏号（3頁：総合展示室のナウマンゾウ足跡化石紹介記事）で触れましたが、この壁面では他にも同様なくぼみを10個以上確認しています。当時は時間の関係でこれらの多くが未調査のまま埋め戻しましたので、今年秋の調査ではある程度の範囲を水平に掘り進め、できるだけ多くのくぼみを調査することを計画しています。既述したように偶蹄類の足跡化石も見つかっていますから、忠類ナウマンゾウ発見地点の地層は他にも多くの足跡化石を包含している可能性があり、今回の調査では複数の足跡が直線上に並ぶ様子（実際に歩いていた状況）や他の動物の足跡化石も見つかるかもと期待しています。なお、1970年の発掘では偶蹄類の歯も1点発見されており、近年オオツノジカの歯であることが明らかとなりました（高桑・添田 2015*²）。これによって少なくとも約12万年前にはナウマンゾウのほかにもオオツノジカも本州から渡ってきていたことが明らか



写真1 忠類ナウマンゾウの復元骨格模型。

手前のケースでは実物化石の一部を入れ替えて展示しています。

かとなりましたが、他に北海道で発見されているこの時代の化石は少なく、今年の調査で新たに足跡化石が認定できれば、太古の北海道を知る上で大変重要なものとなります。

特別展も開催、円山動物園ともコラボ！

幕別町では、化石発見50周年記念事業として、忠類ナウマン象記念館での特別展も開催します(10月5日から11

月4日までを予定)。この特別展では、当館に保管されている忠類ナウマンゾウ化石を全て展示します。全ての化石が里帰りするのは発見以来初めてのことです。また、1970年の発掘で発見された化石の中に1点だけマンモスゾウの臼歯が含まれていた関係で、北広島市が所有する実物大のマンモスゾウ模型も展示します(写真3)。なお、今年は札幌市円山動物園に導入された4頭

のアジアゾウが一般公開され大きな話題を呼んでいます(写真4)、「ゾウ」つながりということで円山動物園ともコラボし、同園の動物達の糞をもとに作製した堆肥を使って忠類小学校でカボチャを作り、秋にゾウ達へプレゼントする企画が進行中です。さらに、円山動物園へのゾウの導入を担当した朝倉卓也氏による講演会「ゾウが来た道 平成版 ミャンマーからきたゾウ達」も行われます！(10月27日予定)。事業の詳細は、決まり次第、幕別町HPやポスター・チラシなどでお知らせしますので、是非ご注目下さい。なお、特別展の様子や発掘調査の結果は、本誌2019年冬号のコラムで速報する予定です。

*1 高橋啓一・北川博道・添田雄二・小田寛貴(2008)北海道, 忠類産ナウマンゾウの再検討. 化石, 84, 74-80.

*2 高桑裕司・添田雄二(2015)幕別町忠類から産出した偶蹄類臼歯化石の再検討. 北海道開拓記念館研究紀要, 43, 21-26.



写真2 2008年の調査で発見したナウマンゾウの足跡(右の矢印)と偶蹄類の足跡(左の矢印)の化石。手前のスケールは1m。



写真3 マンモスゾウの実物大模型。
2016年に北広島市エコミュージアムセンターが同市の小・中学生や市民と作製。



写真4 アジアゾウの親子、シュティン(左:母親)とニヤイン(メス)
(札幌市円山動物園提供)

トピックス

はっけん広場 春の活動報告

2019年3月の土・日・祝日は、はっけん広場で「稲わらを織って、小さなトレーをつくろう」というイベントを開催しました。「稲わら」は、稲の茎などを乾燥させたもののことで、本イベントでは北海道産の稲を利用しました。トレーの作り方は次のとおりです。まず、稲わらを数本ずつ束ねて、いくつかの束をつくります。これらを、道具を使わずに指だけで織ります。一束一束、順番通りに織る必要があるため、大人も子どもも真剣な表情で取り組んでいました。

4月からは、今年度最初のはっけんイベント



はっけんイベント
「稲わらを織って、小さなトレーをつくろう」

「ポップアップカードでつくる春の森林公園」が始まりました。「ポップアップカード」とは、2つ折りになった台紙を開くとイラストが立ち上がる、いわゆる「飛び出すカード」のことです。本イベントでは、百年記念塔や、野幌森林公園内でみられる動植物のイラストを用意しました。まずは記念塔と森林のイラストを切って台紙に貼ります。そこに、好きな動植物のイラスト

を選んで色を塗り、台紙にレイアウトすれば、オリジナルのカードが出来上がります。会場に用意された動植物の写真を見ながら、本物に忠実に色を塗る方、春らしくカラフルに仕上げる方など、それぞれの個性が光ったカードをお持ち帰りいただきました。

(学芸部道民サービスグループ
学芸員 田中祐未)



はっけんイベント
「ポップアップカードでつくる春の森林公園」

地名をとおして北海道を見つめ直す—— 第5回特別展「アイヌ語地名と北海道」のご案内

北海道の地名は、その多くがアイヌ語に由来します。このことは、アイヌ民族が北海道に先住してきたことの何よりの証です。また、特に明治以降に本州からの移住者が北海道へたくさん渡ってきて、そのことを示す地名が北海道の各地で見られるようになります。そして、アイヌ語に由来する地名に漢字を当てはめた地名が作られてきたことなども、北海道の歴史の特徴をあらわすものです。

7月6日から始まる当館の第5回特別展「アイヌ語地名と北海道」では、江戸時代の古地図や古文献などの資料にみられる地名の記録、アイヌ語に由来する地名研究の第一人者である山田秀三の調査記録、近現代をへて現在に至

る北海道の地名の特色などを紹介しながら、〈地名〉をとおして北海道を見つめ直す機会としたいと考えています。

期間中には、特別展テーマにちなんだ講演会や展示解説セミナーのほか、7月17日（道民の日）には特別フォーラムを、8月10日（土）には当館では初めての試みになる「北海道地名クイズ王決定戦」を開催します。この他にも、家族で楽しめる「北海道地名しりとり」や「北海道ふくわらい」など、さまざまな展示や企画を進めているところで

す。
多くの方々のご来場・ご参加をお待ちしています。



アイヌ民族文化研究センターだより

「北の手仕事展」の思い出

津田命子（「北の手仕事 2019」実行委員会代表）



1998（平成10）年、アイヌ文化をまなびあい、受け継ぎ、次の世代に伝えるという希望や志をもつ者たちが集い「アイヌ文化を学び継承する女性の会」を発足させ、2011年に解散するまで13年間活動した。会の愛称を「カリプ（輪）」という。アイヌ語や刺繍の講師と、学び継承しようとするアイヌ女性と和人女性で構成されている。解散後も牛歩の歩みながら、会の目的とする伝世品の複製制作、製作技術の継承、展示会、出版の企画を進めつつ、今回の「現代の作り手によるアイヌ刺繍作品一北の手仕事2019」がはじまった。北海道博物館の第14回企画テーマ展である。

思い返せば「北の手仕事」展は2007年1～2月が1回目、2011年1～5月が2回目、今回が3回目となる。今回から遡る事18年前、2001年2月札幌市資料館ギャラリーで「アイヌ・女の手仕事2001」という初めての展示会を開催、この展示会を実質的な1回目とすれば、2回目を同じ札幌市資料館ギャラリーで、2004年11月「アイヌ・女の手仕事2004」として開催した。幸いなことに、2001、2004、2007、2011、2019年と通算5

回の展示会を開催できたことになる。

「北の手仕事2019」は平成31年4月27日が初日で、令和元年6月9日が最終日である。改元をはさんだ会期は更に老いゆく私にとって忘れられない日程になるだろうし、またあの世に逝くまで何回か「令和」と書くだろうことを想像すると、なにかしら感慨深くもある。

18年にわたり計5回の展示会をもてたことは、作り手一人ひとりの日々の努力の賜物であって、個々の情熱と努力がこの幸運を呼んだのだとおもう。作り手は北海道の様々な地域から参加している。



2011年の展示会の後、会員の作品を写真にまとめて『北の手仕事 展示会「誌上篇」』を出版しました。

カリプへの参加がきっかけで交流を深めた伝承保存会もあった。様々な地域でコツコツと作り続けてきた人々が他の地域の作り手たちと交流し始めたのである。小さな集団同士や個人が手をつなぎ、また他の集団と手をつなぎ、そうして、北海道の南から中央、東など広いひろい地域で輪ができたことは大きな希望である。文化を継ぎ、伝統に沿ったモノ作りに感動し、裾野

を広げてきた手ごたえを感じる。素材が木であれ布であれ、伝統的製作技術が伴ってこそその文化伝承で、加えて発表の機会が「いつかはある。そのうちある。」と考えられることが作り手の制作意欲の一要素となっているのだろう。



「北の手仕事2019」実行委員会の皆さんによる会場設営。

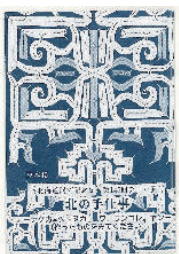


5月25日に津田命子さんの講演会を開催、120名もの方々にご来場いただきました。

老境に足を踏み入れながら、できる事で協力し皆で支えあい、また6回目を開催できればと思う。50年後、100年後、「北の手仕事」を支える次の担い手が現れていることを心の底から願っている。

ラモッシワノ イヤイライケレ。

（アイヌ服飾研究者・「北の手仕事2019」実行委員会代表）



2007年、北海道開拓記念館第145回テーマ展「北の手仕事」のときに作った「豆本」。今はA4判のリーフレットですが、このころはA7判の冊子でした。

記事の本文を津田命子さんに執筆していただき、当館で写真とそのキャプションを添えました。

活動ダイアリー

2019年3月～5月の記録

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。

3月2日(土)

■はっけんイベント「稲わらを織って、小さなトレーをつくろう」を開催。
(～3月31日の土日祝)



3月17日(日)

■古文書講座「脱ゆとり古文書講座(全3回)レベル4」第3回を開催。担当:東俊佑。

■古文書講座「スパルタ古文書講座(全3回)レベル2」第3回を開催。担当:東俊佑。

3月27日(水)

■平成30年度北海道立総合博物館協議会を開催。

4月3日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者:水島未記・池田貴夫。

4月6日(土)

■はっけんイベント「ポップアップカードでつくる春の森林公園」を開催。
(～5月26日の土日祝振)



4月7日(日)

■ミュージアムカレッジ「北蝦夷地ウシヨロ場所物語」を開催。担当:東俊佑。

4月13日(土)

■自然観察会「エゾアカガエルのラブコールを聴こう」を開催。担当:堀繁久・水島未記・表溪太・鈴木あすみ、自然ふれあい交流館スタッフ。

■子どもワークショップ「アイヌ音楽 うたおう・おどろう・ならそう・ひこう」を開催。担当:甲地利恵。

■総合展示室クローズアップ展示①～⑦を展示入替。

①『蝦夷風俗十二ヶ月屏風』を読む(1)

②松浦武二郎の蝦夷日誌を読む

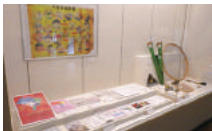
③祈りの造形—死者を悼む(2) 死者用の靴



④サハリン(樺太)アイヌの近現代史



⑤道産子のブラジル移住100周年



⑥おままごとの世界



⑦昆虫から見る生物多様性



4月14日(日)

■古文書講座「はじめての古文書講座(全3回)【入門編】」第1回を開催。担当:東俊佑。

4月21日(日)

■古文書講座「古文書に親しむ(全3回)【実践編】」第1回を開催。担当:三浦泰之。

4月27日(土)

■第14回企画テーマ展「北の手仕事2019」が開幕。(～6月9日(日))



■ニュージーランドマオリ芸術工芸学校日本巡回展「TUKU IHO 受け継がれるレガシー」が開幕。(～5月14日(火))



■「TUKU IHO 受け継がれるレガシー」展関連事業パフォーミングアート「カバ・ハカ」を開催。(～5月12日(日))



5月3日(金・祝)

■ハンズオン「体感! リンリン黒電話」を開催。担当:会田理人・舟山直治。

■ミュージアムトーク「アイヌの伝統的な家の中をのぞいてみよう!」を開催。担当:亀丸由紀子。
■屋上スカイビューを特別開放。

5月4日(土・祝)

■ハンズオン「昔の改札を通ってみよう」を開催。担当:池田貴夫・尾曲香織。

■ミュージアムトーク「「標本」ってなんだろう? 博物館の色々な標本たち」を開催。担当:鈴木あすみ。

■ミュージアムトーク「野幌丘陵で発見されたステラ大カイギュウ化石」を開催。担当:添田雄二。

■屋上スカイビューを特別開放。

5月5日(日・祝)

■ハンズオン「ペンギン形くおきあがりこぼし」にハイタッチ!」を開催。担当:村上孝一・舟山直治。

■ミュージアムトーク「北海道の住まいのうつりかわり」を開催。担当:鈴木明世。

■屋上スカイビューを特別開放。

5月6日(月・祝)

■ハンズオン「縄文土器にさわってみよう」を開催。担当:鈴木琢也。

■ハンズオン「体感! リンリン黒電話」を開催。担当:鈴木明世。

■ミュージアムトーク「「北の手仕事」の美—文化継承活動の精華を見る」を開催。担当:大坂拓。

■屋上スカイビューを特別開放。

5月10日(金)

■カナダ・アルバータ州に職員を派遣(～5月24日)。

5月11日(土)

■子どもワークショップ「博物館を建てる「モノ」のオリジナル図鑑をつくろう!」を開催。担当:鈴木明世・村上孝一。



5月12日(日)

■古文書講座「はじめての古文書講座(全3回)【入門編】」第2回を開催。担当:東俊佑。

5月18日(土)

■自然観察会「アイヌの人びとが利用した植物」を開催。担当:水島未記・堀繁久・表溪太・大坂拓。

5月19日(日)

■古文書講座「古文書に親しむ(全3回)【実践編】」第2回を開催。担当:三浦泰之。

5月25日(土)

■講演会「アイヌの手仕事—衣文化をさぐる—」を開催。担当:津田命子氏。

5月29日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者:三浦泰之・遠藤志保。

人事異動

退職(3月31日付)〈学芸部長〉:舟山直治、〈学芸部社会貢献グループ兼研究部博物館研究グループ学芸主査〉:栗原憲一
再任用(4月1日付)〈学芸部道民サービスグループ兼研究部生活文化研究グループ学芸員〉:舟山直治
転入(6月1日付)〈副館長〉:齊藤文俊、〈総務部総括グループ主幹〉:山岸 睦
転出(5月31日付)〈副館長〉:山中 剛

来館者数

○2019年3月
総合展示室 4,600人 特別展示室 4,496人 はっけん広場 930人
○2018年度合計
総合展示室 99,315人 特別展示室 88,089人 はっけん広場 21,214人
○2019年4月～5月
総合展示室 14,053人 特別展示室 18,106人 はっけん広場 2,476人
○累計(2015年4月～2019年5月)
総合展示室 451,307人 特別展示室 342,623人 はっけん広場 106,138人

森のちゃれんがニュース 第16号

発行日:2019年6月25日

編集・発行:北海道博物館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2

Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657

ウェブサイト <http://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>

©Hokkaido Museum, 2019